# 教えの庭から

## 日常で死と向き合うとき

出雲市斐川町・仁照寺住職　江角　弘道

法事とは、亡くなられた方の冥福を祈って、供養をする仏教の儀式です。日本の仏教は、死を新たな旅立ち、再生ととらえています。「仏説地蔵菩薩発心因縁十王経」（略して「地蔵十王経」）という説話によると、人は死の瞬間に次の生が決定されず、死んでから四十九日の間は、「中陰」といって、どの世界に生まれ変わるかわからない状態にいるとされています。そして七日ごとに現世で行った所業の善悪を判断し、審議されるわけです。その最初の審議、つまり裁判される日が初七日です。本来は、四十九日目まで七日ごとに、亡くなられた人の家で法要をしていましたが、今では、初七日法要は、葬儀の後すぐに行っています。そして四十九日法要が、自宅または菩提寺で営まれるのが、一般的になってきました。

四十九日をもって忌明けとし、この日以降は年忌法要となります。年忌法要は、一周忌、三回忌、七回忌、十三回忌、十七回忌、二十五回忌、三十三回忌、五十回忌と続きますが、五十回忌くらいで、一応の終了と考えられています。ですが、古い先祖の百回忌、百五十回忌等をされる方もいらっしゃいます。

挿絵　平尾恵郷

法事をすることには、大きく二つの意味があると私は考えています。第一には、先祖への感謝があります。私たちは先に亡くなった祖父母や両親からは、大変な恩恵を受けています。そのことへの感謝をするのです。第二には、法事をすることで、必ず来る自分の死を自覚することになります。

昨年の11月には、母の十七回忌と交通犯罪により20歳で亡くなった娘の二十五回忌をしました。母には、仏道の大切さを教わり、その方向に進むようになったことに感謝しました。娘への供養のために、七回忌（2005年）に「交通安全観音」（高さ3・5メートル）を境内に建立しています。今回も交通安全観音様にお参りをし、冥福を祈りました。

今年の8月には、父の三十三回忌法要をしました。父は、78歳で亡くなっており、私は現在その年を超え79歳となりました。法事をしながら、父の死後32年過ぎ、無事に住職を続けられたことに感謝し、死ぬまでこの務めを全うさせてくださいと祈願しました。寺の運営にあたっては、仏壇への花やお膳・お茶などのお供えに始まり、庭や墓などの掃除、檀家様との対応などがあり、これらをほとんど寺庭（じてい、住職の妻）がしています。寺庭さんには大変な苦労をかけていますので、そのことにも深く感謝しました。また、遠くの家族が孫を連れて帰ってきましたので、大きくなった孫を頼もしく思いました。

これまでに何度も法事はしてきましたが、改めて父母の法事をすることで、思い出を振り返り、感謝の気持ちを再確認することができました。法事に対して、面倒に思う人もいるかもしれません。しかしその意義を知り、過ごし方を工夫することで、今生きている意味を再確認できる貴重な時間にもなるのです。日常で「死」に触れる機会はあまりありません。だからこそ、法事は貴重な良い機会となるのです。法事をすれば、先に亡くなった人や先祖様が、現在の家族や縁者を守ってくださるとの深い安心感が湧いてきます。